

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年 6月14日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12387

研究課題名(和文)レジリエンスを引き出す災害後のコミュニティ支援モデルの構築

研究課題名(英文)Constructing a Community Support Model for Building Post-Disaster Resilience

研究代表者

村本 邦子(Muramoto, Kuniko)

立命館大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：70343663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：定期的に東北の4つのコミュニティに入り、アクションリサーチを行いながら、被災と復興プロセスを記述するとともに、レジリエンスを引き出すコミュニティ支援モデルの提案を行った。外部機関は、被災地にパートナーを見つけ、人々が出会う場を設定し、コミュニティのネットワークを広げる媒介として寄与するとともに、被災地の歴史や文化を学び、外部者の視点を持ってリソースを見つけ、徐々にそれを強化する設定に変化させていく。災害をきっかけとする出会いと協働の物語が紡がれていくことで、互いに力を与え合う相互関係が育ち、被災がもたらした新たな意味が生まれていく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災害後のトラウマ治療に関する研究は多くあるが、予防的観点からコミュニティをターゲットにした介入方法に関する研究はほとんどない。本研究によって、災害後のコミュニティのレジリエンスを特定し、時間経過に応じてそれを引き出す支援モデルを提案できたことにより、今後起こり得る大災害にも応用できるだろう。本研究は、アクションリサーチとして、東日本大震災後のコミュニティのレジリエンスを引き出す支援を実践し、復興に寄与しながら、災害後の支援について新たな知見をもたらすと同時に防災に向けた取り組みにもつなげつつあるという点で独創的かつ社会的に意義ある研究だったと言える。

研究成果の概要(英文)：While regularly conducting action research in four communities in Tohoku District, we described the damage by the Great East Japan Earthquake and the recovery process, and proposed a community support model that builds Post-Disaster resilience. The members of the organization working in the disaster area find its counterpart there, set up a place for people to get together, and function as mediators for expanding the community network. Try to find out as outsiders resources by learning the history and culture of the area, they gradually change a setting in a way that facilitates them. The narratives of encounters and collaborations occasioned by the disaster are interwoven into the mutual empowerment which brings about new meanings of the disaster.

研究分野：コミュニティ心理学

キーワード：レジリエンス 災害 コミュニティ支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)東日本大震災直後から被災地では臨床心理学的支援が行われてきたが、個々人を対象とした「心のケア」モデルが一般的であり、被災規模から言って対応が追いつかない現状がある。レジリエンスは「障害、ストレス、逆境に直面してもうまく適応できる力」と定義されるが(Norris et als, 2008)、予防的観点から、被災したコミュニティをターゲットとして、そのレジリエンスに働きかけ、被災による否定的影響を増加させない支援が喫緊の課題となっている。

(2)このような問題意識から、研究代表者らは、平成 23 年度より「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げ、被災地のレジリエンスを引き出すコミュニティ支援を試みながら、アクションリサーチによる研究を続けてきた。具体的には、東北 4 県のなかから 4 つのコミュニティを特定し、現地のパートナーとなる支援機関と長期的な協力関係を結び、定期的にコミュニティに働きかけるプログラムを実践する。被災地の人々や支援者のレジリエンスを特定し強化すると同時に、現地の支援者たちが被災地の被支援者たちのもつレジリエンスを特定し強化する力をつけるという構造をなしている。これらの実践と研究から、伝承文化の豊かな東北では、とりわけ「物語(ナラティブ)」に着目した支援が重要であり、プログラムを協働することによって、「共創する物語(ナラティブ)」を通してコミュニティの復興を支援するという実践の有効性が見えてきた。

2. 研究の目的

(1)本研究は、上記のプログラムを継続しながら、「共創する物語(ナラティブ)」の観点から現地の関係者へのインタビューを行い、エスノグラフィーによって蓄積されたデータとともに分析し、東日本大震災後、それぞれのコミュニティにおいて、時間経過とともに、どのような要因が地域のレジリエンスとして現われ、それはどのような契機や経過を経て力を発揮するようになったのか、被災地外部からのどのような力がそれを支えたのかを明らかにしようとするものである。

(2)最終的に、それぞれのコミュニティにおいて、時間経過とともに人々やコミュニティに与えた東日本大震災の影響と回復に関する「物語(ナラティブ)」はどのように変化したかを追う。それぞれのコミュニティのレジリエンスと言える要因はどこにあったのか、それを強化することのできた外部からの支援はどのようなものだったかを明らかにする。そのうえで、コミュニティのレジリエンスを特定するアセスメント方法の確立、とくにコミュニティの文化的多様性を尊重した方法の確立、災害後のコミュニティのレジリエンスを引き出すコミュニティ支援モデルを構築する。

3. 研究の方法

(1)毎年、東北 4 県で現地支援機関と協働しながら、共創のナラティブとレジリエンス概念に基づくコミュニティ支援を実施し、合わせてフィールドワークを行い、データ収集する。アクション-リフレクソンサイクルを回しながら、有効な支援モデルを改善していく。

(2)研究会、年度末ごとのシンポジウム、学会報告を通じて、継続的に検討を加え、最終年度にはコミュニティの変化とレジリエンス、支援に関する成果をまとめ、災害後の時間経過に添ったコミュニティ援助モデルを提示する。

4. 研究成果

(1)研究目的のひとつであったそれぞれのコミュニティにおいて、時間経過とともに人々やコミュニティに与えた東日本大震災の影響と回復に関する「物語(ナラティブ)」はどのように変化したかについては、エスノグラフィーとして、『対人援助学マガジン』への連載論文として表現

した（「5.主な発表論文等」を参照）。

(2)それぞれのコミュニティのレジリエンスと言える要因はどこにあり、それを強化することのできた外部からの支援はどのようなものだったかについては、「東日本大震災の被災と復興におけるコミュニティ・レジリエンスと外部支援」として『対人援助学研究』にまとめた（「5.主な発表論文等」を参照）。要約すると、レジリエンスの源は、自分たちのことは自分たちでやるという主体的決意にあり、それゆえにこそ、支援からエネルギーを引き出すことができる。同時に、外部者も被災地から力をもらい、危機時の出会いが相互にエンパワーし合う関係となる。コミュニティのレジリエンスを引き出す支援には、支援する/されるという一方向的な関係は妨害因となり、むしろ協働することによって、「共創する物語（ナラティブ）」が編み出され、双方の回復・成長に向かっていく。東北ではと民話や祭事など伝承文化が豊かであり、とりわけ「物語（ナラティブ）」に着目した関りが重要だった。

(3)コミュニティのレジリエンスを特定するアセスメント方法と災害後のコミュニティのレジリエンスを引き出すコミュニティ支援モデルは図1のようなものとなる。

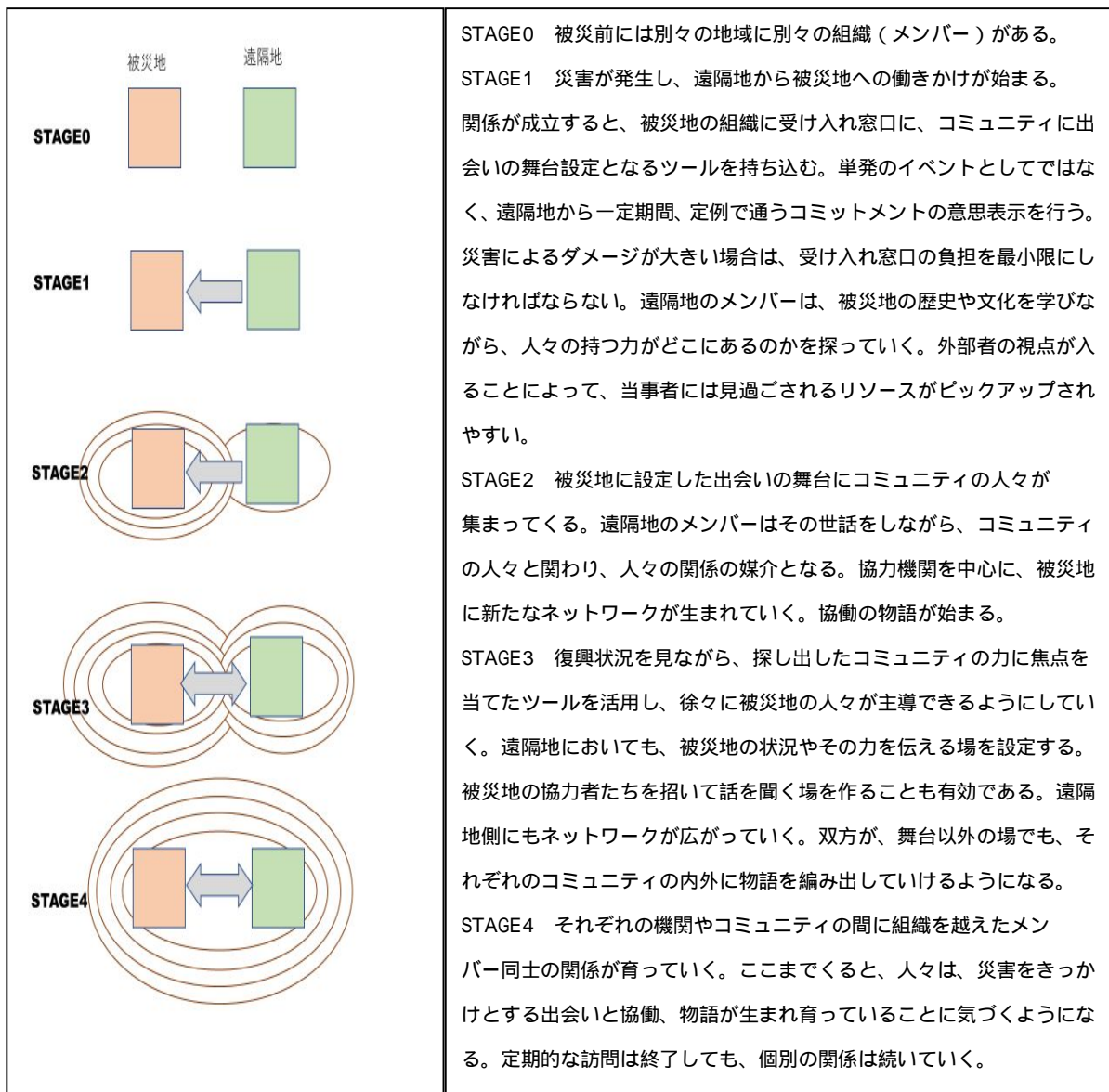


図1 災害後のコミュニティのレジリエンスを引き出すコミュニティ支援モデル

野家(2016)は、自己物語は他者の物語と出会い、交錯し絡み合うことによって、一種の間主観的な物語を結晶させ、この間物語性(inter-narrativity)の次元に「歴史」が立ち上がるとする。トラウマのトラウマたる所以は、恐怖に伴う圧倒的無力感と孤立無援感に由来する関係性の破壊にあり、回復は破壊されてしまったさまざまな関係を紡ぎ直すこととするならば(村本, 2015)レジリエンスは、それに抵抗し得る有力感と他者との絆による関係性の強化にある。語る-聴くという関係の相互作用によって物語が生まれ、歴史のなかに自らを位置づけ、語り継がれていくとすれば、未来の災禍に対するレジリエンスも形成されていくだろう。

一般に、災害後の心のケアのモデルとしては、心理的応急処置を表す PFA (Psychological First Aid) が知られているが(兵庫県こころのケアセンター, 2009; PFA ジャパン, 2011)本研究からは、「こころのケア」という言葉には、支援者の意図に関わらず、「ケアの必要な被災者」というラベリングによって、被災者の力を奪ったり、支援を受けることへの拒否をもたらしたりする可能性があることが明らかになった。被災直後には、「こころのケア」を持ち込まず、被災者が安全と日常性を取り戻すための物理的支援をしながら、被災者の主体性回復のナラティブを支え、心理的応急処置で対処しきれないものを補完するものと位置付けたい。

(4) 本研究は、アクションリサーチという形で、実際に被災地支援を続けながら行われてきた。研究期間中、青森、岩手、宮城、福島において計 12 回のプロジェクトを実施した(家族漫画展と各種支援セミナー)。各地の受け入れ窓口となった機関は、地域の特性を活かしながら、地域でのネットワークを拡げ、活発に現地における支援活動を展開している。これも本研究のひとつの成果と言えるだろう。また、2016 年に熊本地震が発生し、本研究との比較を行いながらそれを発展させる形で、婦人相談員のネットワークを中心とした外部支援を試みた。その成果は、全国婦人相談員連絡協議会による『緊急時相談対応ハンドブック』、および全国の各地域ブロックにおける防災研修という形で結実した。大きな災害時に、コミュニティのレジリエンスを引き出す有効な外部支援を行う前提として、それ以前の緩やかなネットワークができていと有利に働くことが明らかになったので、これをひとつのモデルとして、さらに、各種対人援助職団体における防災ネットワークを作っていくことに挑戦したい。なお、臨床心理士会においても、この動きを始めている。

本研究は、アクションリサーチとして、東日本大震災後のコミュニティのレジリエンスを引き出す支援を実践し、復興に寄与しながら、災害後の支援について新たな知見をもたらすと同時に防災に向けた取り組みにもつなげつつあるという点でも、独創的かつ社会的に意義ある研究だったと言える。協働するツールとして対人援助に関わる活動以外にもさまざまなバリエーションが考えられ、災害後のボランティア活動を継続してきた他の団体においても本研究で明らかになったことが適用できるかどうか今後の課題としたい。また、東北の持つ伝承活動や信念体系によるレジリエンスについてもさらに研究を深め、都市型災害におけるレジリエンスと比較しながら検証していきたい。

なお、東日本における本プロジェクトは、2020 年まで継続していくため、最終的な成果の書籍出版は、2020 年度末を予定している。

< 引用文献 >

兵庫県こころのケアセンター(2009)『サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き第二版』(National Child Traumatic Stress Network & National center for PTSD)
村本邦子(2015)「臨地の対人援助学 『東日本・家族応援プロジェクト』から見る東日本大震災の復興の物語」村本邦子、中村正、荒木穂積(『臨地の対人援助学』晃洋書房 1-8

野家啓一(2016)『『物語』を生きる』せんだいメディアテーク(2016)『物語のかたち』7-12
PFA ジャパン(2011)『WHO 版心理的応急処置(PFA) フィールド・ガイド』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 20 件)

- 村本邦子、東日本大震災の被災と復興におけるコミュニティ・レジリエンスと外部支援 ~ 証人の観点からのショートストーリー分析、対人援助学研究、査読有(掲載確定)、2019
鵜野祐介、民話を<語る 聞く>ことと災害・厄災レジリエンス、対人援助学研究、査読有(掲載確定)、2019
中村正、地域との協働をかたちにする支援者支援セミナーの経験、対人援助学研究、査読有(掲載確定)、2019
村本邦子、周辺からの記憶 22: 未来のための思い出ココロかさなるプロジェクト、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.9、No.4、2018、pp.168-178
村本邦子、周辺からの記憶 21: 2015 年福島、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.9、No.3、2018、pp.141-152
村本邦子、周辺からの記憶 20: 2015 年むつ・多賀城・福島、対人援助学マガジン、査読なし、2018、Vol.9、No.2、pp.174-203
村本邦子、周辺からの記憶 19: 2015 年夏の福島で、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.9、No.1、2018、pp.178-197
鵜野祐介、大震災をのりこえ、民話を語りつぐ、子どもの文化、査読なし、Vol.50、No.8、pp.17-21
村本邦子、周辺からの記憶 18: 2014 年 3 月 NY で、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.8 No.4、2017、pp.148-160
村本邦子、周辺からの記憶 17: 2014 年福島のこと、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.8、No.3、2017、pp.155-171
鵜野祐介、うたとかたりの対人援助学 第 4 回『遠野物語』第 99 話と「悲哀の仕事」、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.8、No.3、2017、pp.253-255
村本邦子、周辺からの記憶 16: 2014 年度岩手、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.8、No2、2017、pp.177-189
村本邦子、周辺からの記憶 15: 2014 年度、宮城・岩手・民話との出会い、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.8、No.1、2017、pp.144-155
鵜野祐介、不条理と向きあうために 東日本大震災から六年、子どもたちに語り継ぎたいこと、子どもの文化、査読なし、Vol.49、No.5、pp.26-32
村本邦子、周辺からの記憶 14: 2014 年度 日本コミュニティ心理学会・むつ、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.7、No.4、2016、pp.168-179
村本邦子、境界を超える~場(トポス)への回帰、女性ライフサイクル研究、査読なし、Vol.25、2016、pp.4-9
村本邦子、周辺からの記憶 13: 2013 年度福島・シンポジウム、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.7、No.3、2016、pp.160-173
村本邦子、周辺からの記憶 12: 災害とコミュニティ~物語、記憶、レジリエンス、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.7、No.2、2016、pp.151-168
村本邦子、周辺からの記憶 11: 2013 年度むつ・多賀城・宮古、対人援助学マガジン、査読なし、Vol.7、No.1、2016、pp.176-190
鵜野祐介、「風の電話」がつかなくもの: ポスト 3,11 の子どもの文化と声をめぐる断想、子どもの文化、査読なし、Vol.48、No.9、2016、pp.36-39

〔学会発表〕(計 14 件)

- 村本邦子、「土地の力」と災害復興~被災地のエスノグラフィーを通して 山元町復興による民話・伝承の力、日本質的心理学会第 15 回大会、2018
村本邦子、災禍を生き抜く女たち~原発事故によって避難を強いられた A さんのライフストーリー、日本質的心理学会第 15 回大会、2018
村本邦子、「被災と復興の証人(witness)になる」とはどういうことだったか?~「証人になること」と倫理、第 10 回対人援助学会、2018
中村正、「被災と復興の証人(witness)になる」とはどういうことだったか?~「記憶の多様なかたち~震災・災害の表象論から、第 10 回対人援助学会、2018
鵜野祐介、「被災と復興の証人(witness)になる」とはどういうことだったか?~民話を<語る/聞く>ことと災害・厄災レジリエンス、第 10 回対人援助学会、2018 年
村本邦子、被災から防災へ、ローカリティからネットワークへ~『災害時相談対応ハンドブック』作成と防災研修の経験から、第 10 回対人援助学会、2018
村本邦子、災害と女性、全国婦人相談員・心理判定員研究協議会貴重講演、2017 年 10 月
Kuniko Muramoto, Tadashi Nakamura, and Shiro Dan, Post Disaster Community Support with Family Manga Exhibition as a Tool for Intervention and Outreach: Reflection on

the Past Five years from a Narrative Perspective, 19th International Conference on Community Psychology and Mental health, 2017

村本邦子、熊本地震と婦人相談員の記録、全国婦人相談員・心理判定員研究協議会、2016
村本邦子・中村正・杉浦裕子、支援者支援でコミュニティの力（レジリエンス）を引き出す～「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」の事例をもとに 第9回対人援助学会、2017
村本邦子・中村正、「物語」を手掛かりにした東日本大震災後コミュニティ支援の実践 — ホモ・ナラティブリスト（物語る人間）と聴く人が出会う「復興の証人10年プロジェクト」から、第8回対人援助学会、2016

村本邦子、ハワイの力（resilience）と Kids Hurt Too Hawaii の強み(strength)～グリーンワークと東北子どもキャンプ、第8回対人援助学会、2016

Kuniko Muramoto, Transforming the Self to Transform the World Northeast Asian Regional Peace Building Institute Workshop, 2016

村本邦子、コミュニティの中で育つ対人援助職者「東日本・家族応援プロジェクト」5年を振り返って、第19回日本コミュニティ心理学会、2016

〔図書〕(計1件)

全国婦人相談員連絡協議会・村本邦子、災害時の相談対応：婦人相談員ハンドブック、全国婦人相談員連絡協議会、2018、全30頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：鶴野祐介

ローマ字氏名：Uno Yusuke

所属研究機関名：立命館大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10269970

研究分担者氏名：中村正

ローマ字氏名：Nakamura Tadashi

所属研究機関名：立命館大学

部局名：産業社会学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：90217860

研究分担者氏名：団士郎

ローマ字氏名：Dan Shiro

所属研究機関名：立命館大学

部局名：応用人間科学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：20388101

2018年3月31日まで

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：団士郎

ローマ字氏名：Dan Shiro

2018年4月1日～2019年3月31日

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。